

血とバラの日々

— メキシコのリンチ報道とテレビドラマ —

Días de sangre y rosas: noticias de linchamientos y telenovela

梅 本 英 二

Eiji UMEMOTO

はじめに

2004年11月23日夕刻から夜にかけてのメキシコのテレビ、ラジオ各局は、こぞってメキシコシティ南部、メキシコ州との境界近くに位置するトラワック区、サン・フアン・イスタヨパンからの生中継の音声、映像を流し続けていた¹⁾。午後6時前、当地において勤務中であった予防警察 (Policía Federal Preventiva) 所属の警察官3名が住民によって拘束され、暴行を受けているとの報を受け、各社は上空にヘリコプターを飛ばして空からの実況を行うと同時に、関係者、当事者へのインタビューを放送することになる²⁾。メキシコシティのラジオ局モニターが最初にこの事件を伝えたのが午後7時24分であった。午後9時を過ぎた頃には、拘束された警官たちにインタビューを行い、彼らの名前、所属とこの地区での任務が小口の麻薬取引に関する捜査であったことを聞き出していたTVアステカのレポーターがそのことを報告するとともに、彼ら警官たちの健康状態が既に楽観を許さない状況にあることに言及している。

一方、TVアステカのニュース番組「エチョス (Hechos)」では、ひとりの女性住民がインタビューに答え、イスタヨパンの人々は不

審な男たちが数日前より小学校の前で子供たちを写真やビデオにおさめている様子を目撃してきたこと、また彼ら写真を撮っていた男たちと別の女性一人が2人の子供をタクシーに乗せて連れ去ったことを証言している³⁾。これに対して、別のテレビ局テレビサが予防警察に対して行った電話インタビューでは、それに答えた責任者は警官たちと言を同じくして、拘束されている者たちの任務は麻薬密売に関わる捜査であり、住民たちが彼らにかけている嫌疑は全く根拠のないものだと説明した (La Jornada 24/11/2004)。

このゴールデンタイムのリアリティーショーは、これら暴行を受けていた警官のうちの2名の身体に住民によって火が放たれたことで酸鼻なクライマックスを迎えることになる。火がつけられる以前に彼らが度重なる暴行によって既に絶命していたのか、或は彼らが生きのまま放火されたのかは不明であるが、こ

- 1) メキシコ連邦区 (México, D.F.) が正式名称であるが、以下慣習に従ってこう呼ぶ。
- 2) メキシコの警察機構は、犯罪予防の役割を担うSecretaría de Seguridad (警察) と、犯罪発生後の捜査を行うProcuraduría General de Justicia (司法警察) から構成されており、予防警察は前者に属する。
- 3) 誘拐が現実に生じたか否かは不明であるが、検察官事務所はそうした被害の届け出は受けていないとしている。

の出来事の後、ようやくテレビの視聴者たちは、数百人からなる予防警察、司法警察部隊の投入によって3人目の警官が救出されるのを目にする (Fuentes Diaz 2006)。

これと同じ時間帯に別のチャンネルでは、テレノベラと呼ばれる、週5日6ヶ月放送を通常のサイクルとする連続テレビドラマが流されていた。テレノベラは基本的には、メキシコ、ブラジル、コロンビア、ベネズエラなどで自国内の市場向けに制作されるが、現在ではこれらの国の重要な輸出品のひとつとなっており、ラテンアメリカ諸国、米国やスペイン、ポルトガルといった言語の障壁のない国々や地域、さらにはアジア、アフリカ、ヨーロッパにいたるまで世界中で多くの視聴者を獲得している。メキシコをはじめとするラテンアメリカでこの娯楽ジャンルに求められているのは、制作国の間で登場人物の性格設定、物語全体のリアリティーさなど、多少の傾向の違いはあるものの、基本的には現実にはありえないような成功物語、恋愛物語などの空想の世界である。しかしながら、そのおとぎ話が展開される世界は、消費者である視聴者の住む現実の社会から完全に遊離しているのではなく、例えば市井の人々の生活形態や言語などの日常の表現形式が取り込まれており、視聴者が登場人物に自らを重ねることができるようになっている。

本稿では、この同じ時間帯に異なったチャンネルで放送されていた、リンチ事件の報道とテレビドラマから、メキシコという想像された共同体を支えているものを明らかにする。メキシコは、他の近代国民国家がいずれもそうであるように、多様な文化、習慣、言語をもつ異なったエスニック集団の人々をひとつのナショナルなるもの (イメージ、イデオロギー) の下、統合して出来上がっている共同体である。しかし、この具体的に表象された

ナショナルなるものだけでこのメキシコという共同体が成立しているわけではない。そこには、こうした公的なイメージ、イデオロギーとは別の、いくつかの隠された規範が存在する。このような、公には語られないが、その実、社会を内部から密かに支えている規範が、一方は現実におこりつつある殺人事件の実況、もう一方はフィクションの夢物語という、全く異なった形態の番組の中に見て取れるのである。

それは、テレビという媒体がメキシコという政治経済的な単位の枠内で流通している、イメージや表象、主張の総体を映し出す鏡であるからである。一方で、この媒体は個人や集団を具体的なイメージでもって描写することができるゆえ、ある特定の共同体をつくり出そう、また維持しようとする意図で、視聴者に教育的効果を及ぼすことが可能である。そしてもう一方では、この媒体は資本の論理に従う商品を生産するものでもあるゆえに、制作する側も、それを消費する人々の意向を尊重し、ある程度それに従うことになる。しかし、それはメキシコの支配層からのイデオロギー注入の装置でも、また大衆の好みを単純に反映するだけのものとしても解されてはならない。これらのイデオロギーも嗜好も、その背後に、メキシコというひとつの共同体を越える歴史的、地理的な拡がりを持っているからである⁴⁾。テレビという媒体は、こうした政治的経済的要因によって産み出された様々なものの見方、意味が繋ぎ合わされ、ある一定の方向性を持ったものとして形をなす

4) テレノベラの直系の祖先といえるのはアメリカのソープオペラと呼ばれるテレビドラマである。このソープオペラの源は1930年代にまで遡ることができる。当時ラジオソープオペラと呼ばれていたこのラジオ小説番組の名称は、それらの番組のスポンサーの多くが家庭台所用用品を製造する企業であったことに由来する。最もエリート的な芸術ジャンルであるオペラという名称を用いることによって、最も卑近な家庭掃除洗濯用品に象徴的な価値を与え、その販売を促進しようとしたのである。

場所なのである。

報道という表象

リンチ (linchamiento), 民衆の裁き (justicia popular) という呼び名で知られる, 集団で拳, 石や棒, 山刀など日常の道具でもって被害者に暴行を加え, 更には火を放って死に至らしめるこの衝撃的な行為を目にして, 中継を見ていた中の少なからぬ数の人たちの脳裏には, なぜ「彼ら」はこうした蛮行にはしるのか, という疑問が浮かんだはずである。事件を伝える翌日の全国紙の見出しに並ぶ, 「住民の憤激」「アルコールと人肉の焼ける臭い」(El Universal 24/11/2004) などのセンセーショナルなことばが, そうした困惑を裏付けているように見える。なぜリンチという暴力行為が法治国家の中で, あたかも国家の管理が存在しないかの如く行われたのか。近代国家において唯一合法的に暴力を行使できるのは警察, 軍隊という国家の治安防衛機関に限定されるにも拘わらず, 公然とこうした違法行為が中継されている事実から, メキシコという同一の政治的経済的単位の中で生活している人々が近年多かれ少なかれ感じている, 治安悪化という不安が現実のものとして確認されることになる。それとともに, 事件の当事者(加害者, 被害者)である低所得者層の人たちと社会的階層を異にする視聴者たちは, 彼らがおそらくかつて一度も足を踏み入れたことのないであろう, こうした出来事が発生する社会の周縁部での生活の実態に, これらの報道を通して触れることにもなる⁵⁾。

メキシコ社会の広い層で実感されている治安の悪化という条件に加え, 事件が発生した地区における劣悪な社会環境が伝えられることで, その凄惨で野蛮と見える行為にも相応の何らかの理由が存在することが多くの視聴

者にも気づかれることになる。ラテンアメリカ諸国において80年代後半からその報告件数が急激に増大し, マスコミを通じて広く知られるようになってくる, こうしたリンチと呼ばれる集団による暴行事件を概観すると, 彼らの, 我々の目には一見過剰な暴力の行使が自己防衛の行為であり, その根底にあるのは, 治安の悪化, 日常生活を営んでいく上での社会的不安という問題であることが見えてくるからである⁶⁾。

事実, 今日の社会の不安を反映するかのようなこうしたリンチ事件が相次いで報告されるラテンアメリカに住む人々の間には, その原因に関して日常の生活感覚に基づくあるひとつの合意が存在している。それによれば, この公然たる集団暴力の行使は社会の機能不全の末期的症状であるという。弱体な国家, 汚職の蔓延などによって, 治安を維持すべき警察, 犯罪者を裁く検察, 裁判所などの機関が機能せず, 犯罪が日常化している社会においては, 社会の周縁部に位置する人々が自らの生活を守るのは自らの手をおいて他には存在しないからである。この, 自己防衛機制の表れとしてのリンチ, すなわち彼らが自らの手で犯罪者を処罰するのは自らの家族, 村落, 社会を守るためであるという見方は, 例えば植民地主義と内戦の後遺症として行政司法機関の腐敗, 武器の流通, 暴力での解決が日常化してきたグアテマラでは, こうしたリンチ事件が頻繁に発生する貧困地区の住民のみな

5) メキシコでは, 現場で活動する警察官という職種は, 職業軍人と同様に, 高等教育を持たない, 低所得者層出身の人々にとって安定した収入を得るための数少ない選択肢のひとつとなっている。

6) リンチ事件は, 当局へ通報されない, 警察で殺人事件として処理される, 等の理由によりその発生件数が見えにくい。しかし国連グアテマラ人権監視団(MINUGUA)の統計によれば, グアテマラでは1996年から2002年に482件, またベルーでは警察の統計として2004年だけで1993件ものケースが報告されている(Krupa 2009: 35)。メキシコでは, 1987年から98年に103件, 1991年から2003年には222件という数字が伝えられている(Vila 2005: 20)。

らず、市民一般、そして行政司法を司る官僚、政治家たちによっても支持されている (Gody 2006:15)。メキシコの場合もまた、1980年代後半からの、国家の役割を市場の調整機能に委譲する新自由主義 (ネオリベリズム) 的な政策への転換により増大した貧富の差とそれに伴う急激な治安の悪化という社会状況を考え合わせるならば、上のような見方は、我々を納得させるだけの説得力を持っている (Fuentes Díaz y Binford 2001)。

こうした報道は、リンチが行われる社会の周縁部の現実を視聴者にじかに伝えることで、日頃こうした社会環境には無縁な層の人々の関心を同じ政治経済的単位内に住む別の階層の人々の生活に向けさせることになるが、それと同時に、それは社会のインフラを整備し、治安を守るべき役割を怠っている行政、司法当局、政府への抗議、改善を要求するアピールともなっている。リンチ事件を鎮圧し、その被害者を救出する任務を帯びて住民と対峙している警官隊が足を踏み入れることの出来ない (或いはしない) 場所に、冒頭でも見たように、新聞記者や報道のカメラマン、テレビ取材、中継のアナウンサーやカメラが入って映像を流したり、被害者や住民にインタビューを行うことができるという事実は、リンチ事件の当事者である人々がこうしたマスメディアを意識し、それを自らの社会環境改善のための有効な手段のひとつであるとみなしている証拠である。冒頭の事件現場で、全国紙のインタビューに答えて一人の女性は言う。「当局が治安強化の手だてを何もうたないのであれば、我々は子供たちを守るためにいかなる手段も選ばない」 (El Universal 24/11/2004)。さらには、このリンチという行為は、行政、司法機関が機能していないことで逮捕、検挙される確率が限りなくゼロに近く、仮に逮捕、検挙されても、少額の賄賂で簡単に釈

放されるという現実の中、これらの地域で犯罪を行おうとする者に対しての強烈な牽制、威嚇のメッセージともなっている⁷⁾。「この村につけ込もうとする輩は皆こんなふうにしてやる」、いまだ煙が立ち上る警官の遺体の傍らで一人の住民が叫んだことばである (El Universal 24/11/2004)。

2004年のこの出来事に関しては、非合法的な左翼武装組織の内偵を行っていた警察官に証拠を掴まれることを恐れたその組織のメンバーが、子供の誘拐という、治安悪化によって肥大化した被害妄想につけ込んでリンチを煽った、あるいは、麻薬密売の捜査を行っていた警察官を麻薬売人がやはり誘拐という嫌疑をかけてリンチにかけた、等々、その後も様々な憶測が飛び交っているが (El Universal 5/12/2004)、こうした、公権力の保護が及ばない大都市の周縁部や農村部においては、それに代わる治安維持の手段のひとつが犯罪者に対する集団での暴力の行使であることには疑いをはさむ余地はない。また、そうした行為を一種の見せしめとして広く世間に知らしめることが、犯罪の抑止力として機能するであろうことも想像に難くない。しかし、こうした、マスメディアを通じて当局や犯罪者予備軍、一般市民たちに自らの窮状を訴えて、何とか劣悪な社会環境を改善しようとする住民たちの目論見は、必ずしも彼らの思い通りに伝達されるわけではない。マスメディアのすべての消費者が、こうしたリンチやそれらが発生する地域の映像を目にして、集団暴力行使の原因を国家の機能不全による社会不安にあると考えるわけではないからである。

事件の当事者 (加害者、被害者) である低所得者層の人たちとは社会的階層を異にする視聴者の中には、リンチ事件の当事者である

7) メキシコでは牢から出るよりも入る方が難しい、とは巷間よく聞かれる自嘲気味の軽口である。

低所得者層に属する人々と、彼ら中流以上の社会階層の人々とが、同じ社会（国家、資本主義市場）を構成していることを理論としては理解しながらも、集団で拳や石、殺傷を目的としない日常の道具を使って暴行を加えるということ、また被害者を殺害するだけでなく、その遺体を損壊するという事実を映像媒体を通して目にすることで、加害者たちが住む地区の劣悪な社会環境にのみその原因を帰すことに疑念を表する人々もいるのである。同じ理由で、加害者たちと同じ低所得者層に属しながらも、加害者たちは他の国民たちとは全く異なった社会に属する者であるとして、リンチという行為を社会環境に由来する自己防衛に還元してしまうことに異を唱える人々もいる。

そうした人々の反応は、いまだリンチ事件が猖獗をきわめる以前、今からおよそ四半世紀前の1985年におこった集団暴行事件の際に顕著に見られた。それは冒頭のイスタヨパンのケースと同様、メキシコ社会において政治的にも経済的にも周縁部に位置する人々が住む場所で起きている。イスタヨパンは現在では、首都の膨張により行政上はメキシコシティに含まれ、都市の一貧困地区のような様相を呈しているが、もともとは先スペイン期からある、農業を営む先住民の集落であった。1985年の事件の舞台となった、首都から東におよそ150キロほどのプエブラ州サン・フランシスコ・コアパ村も同様に、先スペイン期にはメソアメリカ地域で最も重要な祭祀の中心地であった Cholula の近隣に位置する、先住民の末裔が住む村であり、またそこでの出来事も、先述のケースと同じく、誘拐犯との嫌疑をかけられた外部の人間が被害者となっている。この被害者となった巡回販売の菓子売り商人3人は誘拐容疑で村の留置所に収監され、その後法律の定める司法手続き

をふむべく、Cholula市の警察署に連行される筈であった。しかし、彼らはその報を聞きつけた数百人の村人たちによって村の牢から中央広場へ連れ出される。そこで行われたのは、先のイスタヨパンと同様、凄惨な暴行と火による遺体の損壊という行為であった (Shadow y Rodríguez-Shadow 1991)。

1985年のコアパ村、2004年のイスタヨパンでも、マスコミの伝えるところで人々の耳目をひいたのは、彼ら被害者が集団で暴行されたことに加え、そのうちの何人かが白昼公衆の面前で焼かれたという事実であった⁸⁾。もう少し正確にいうならば、マスメディアが積極的にこれらの事件を伝えたのは、そういったおぞましい出来事があったからであるといえる。マスコミもやはり資本の論理が支配する市場の中の一企業である限りは、読者、視聴者の耳目を引きつける事件を優先的に取り上げるのは自然なことである。コアパ村での事件を翌日の地元紙は次のように伝えている。「怒りと不信のあまり、数百人の村人たちは野蛮にも商人たちに集団で暴行を加えた」。こうした記述からも窺えるように、これら加害者である村人たちは、彼らの行為を伝える記者の目から見て、理性の欠如した文明化の度合いが低い人々であるとみなされている。ここには、こうした集団による暴力の行使は彼らリンチの加害者たちが過去から受け継いできた習慣によるものであり、それは都市部に居住する政治的経済的により恵まれた位置

8) もうひとつこれらのケースで注目されるのは、リンチ事件の直接の引き金となったと考えられるのが子供の誘拐であったという点である。メキシコでは先スペイン期から、宗教的に重要な建築物の土台に子供を人柱として使うという習慣があった。こうしたことから、今日でもこれらリンチ事件が起こった地域の農村部住民、また農村部に出自を持つ都市の低所得者層の間では、橋梁、政府の建物などの公共の建築物の土台に人柱を使用しているという噂が絶えない (Shadow y Rodríguez-Shadow 1991)。先スペイン期、植民地時代に関しては Durán (1967), Sahagún (1981) を参照のこと。

にある、理性を持った人々の文明化された習慣とは全く異なっているという見方、つまりメキシコという同一の政治的経済的枠組みの中に、異なった文化を持っている、隔絶した別個の社会集団が存在しているという見方があらわれている。近代国家の中に、西洋的な理性に基づいた行動規範とは異なった、前近代の迷信と本能に従って行動する心的メカニズムを持った人々が存在しているという見解が示されているのである⁹⁾。

メキシコにおいて衆人環視の中での集団による暴行、殺害事件の嚆矢とみなされている出来事がおきたのは、政府の役割を縮小し、市場の論理に優先権を与えることで貧富の差を拡大し、社会不安を助長した最大の要因とされる新自由主義政策がとられる以前の1968年であった。この、リンチ事件の代名詞のように喧伝されてきた出来事がおこったのが、社会不安が今日ほど深刻化する以前であったという事情もあって、長い間、リンチは社会関係、社会構造といった政治経済的要因に端を発しているのではなく、習慣、心的構造という文化的側面の問題であると考えられてきた。1988年発足のサリーナス政権は、国家の役割を減ずることで経済の近代（グローバル）化をはかろうとしたのであるが、農村部ではその衝撃は主要作物のとうもろこしの価格下落、国家所有の共有地（エヒード）の私有化という形で表れた。これは小規模農民層を国家の庇護下から国際市場の荒波に投げ出すことを意味し、農村経済を今日の壊滅的な状況に追いやることになった。これに対して60年代は、メキシコ革命後の共同組合主義的な社会から50年代の民間資本の導入による混合経済社会を経て、徐々に国家の役割が変質しつつあった時期にあたるにせよ、いまだ革命後の政権によって確立された、農村への経済的下支えなど、国家の家父長的役割は健在

であったといえる。

この1968年にプエブラ州サン・ミゲール・カノアでおきた学生の殺害事件は、こうした時代背景もあって、農村部に居住する先住民の末裔たちの前近代的な習慣と野蛮な心性を表す一例として、長い間人口に膾炙されてきた。後年制作された映画が示すところによれば、当時欧米、日本をはじめとした国々において興隆しており、メキシコにおいても学生、知識層を中心に高まりをみせていた左翼（＝無神論）運動、思想への住民たちの反発と嫌悪感が、村の司祭の煽動によって、たまたま村に滞在中であった学生たちに対する、こうした集団での暴力となって表れたとされている¹⁰⁾。

感情教育としてのテレビドラマ

治安の悪化が社会のあらゆる層で経験され、頻発するリンチ事件がそうした劣悪な社会環境に由来することが誰の目にも明らかな今日においても、この68年の事件で定着した、「非文明的で、激情に駆られる、野蛮な人々によって行われる集団での暴行」というイメージはマスメディアの報道から消え去ることはない。リンチ事件が繰り返し発生する、農村部や都市の周縁地帯の居住者たちに対するこの特別な眼差しというものは、冒頭のリンチ

- 9) その一例は、1983年にペルーで8人のジャーナリストが山間部住民によって殺害された事件の報告書に明らかである。彼ら辺境の農民たちは原始性、伝統という属性を付与されており、都市部の住民の文明とは隔絶した前世紀の社会と形容されている（Vargas Llosa 1990）。
- 10) プエブラ自治大学で働く若者たちがマリンチュエ山への登山を計画するが、悪天候のためその麓のカノア村で一夜を過ごすことになる。そこで折からの左翼学生運動に危機感を抱いていた司祭が、これらの若者たちは共産主義（無神論）者であり、彼らの村での活動を阻止せねばならないと村人たちに信じ込ませた結果、こうした悲劇が起こったと巷間伝えられ、後に制作された映画もこうした解釈をとっている。しかし、当日司祭は村にいなかったという証言もあり、実態は闇に包まれたままである（El Universal 15/9/2008）。

中継と同時刻に別のチャンネルで放送されていたテレビドラマの中にも存在する。それは先住民に対する、植民地時代から今日にいたるまで続く、優越感と侮蔑を伴った眼差しである。彼ら先住民は、新たに歴史をひも解く必要もなく、植民地時代から近代国家メキシコの国民となった19世紀そして今日に至るまで、経済的には常に植民地政府、官僚、入植者、大土地所有者、資本家たちの搾取の対象であり、また文化的には、植民者側、近代国家の支配エリート層、都市住民から、全く異なる心的構造を持つ完全な他者、それも劣った他者として認識、表象されてきたのであった¹¹⁾。

20世紀初頭に勃発したメキシコ革命後の政権は、メキシコをヨーロッパ人と先住民の混血であるメスティーソの国として再定義する。そうした新しいメキシコのナショナルシンボルとして作り出されたのが、牧童風の男性像と刺繍入りのブラウスとスカート、ショールを纏った女性像であった。こうした、言語や習慣の多様性、腐敗した官僚主義などの植民地時代の様々な負の遺産を背負いながらの近代国家建設の過程で、革命による混乱、産業構造の変化によって農村から多くの人口が都市へと流入することになる。メスティーソ国家のシンボルとして、メキシコ各地の多様な風俗を恣意的に総合した人物像に付与されたのが、この農村から出て来て単純労働に従事することになった新興の都市下層民が有していたとされる、無責任、怠惰、宗教へののめり込み、過度の飲酒等の性格付けであった。こうした性格は支配層から侮蔑をもって言及されてきたにも拘わらず、民衆の日常生活に親しい習慣で、彼らに共同体への主体的な関わりを感じさせるがゆえに、ナショナルなイメージへと取り込まれたのである。これらの人物像は30年代から始まる、ナショナリズム

高揚期の映画に欠かせない登場人物として、そして後にはテレノベラのヒーロー、ヒロインの原型としてあらわれることになる(Pérez Montfort 2000:142)。

こうしたナショナルイメージを体現する人物像によるドラマの直系であるテレノベラには、一定の文法、規範とでもいうべきものが存在する。善悪の対立、道徳的な憤りを基本とする構成がそれである。それとともに、このジャンルを特徴づけるのは、均質な共同体として想像されるメスティーソ国家メキシコをその内部で密かに支えている、それとは矛盾するような、家父長制、男性至上主義(マチスモ)、社会ダーウィニズムという階層制のイデオロギーである。テレノベラとリンチ報道の語り口との間で共通するのが、最後に挙げた社会ダーウィニズムという、近代国家建設の障碍と考えられてきた先住民の問題を解決するための方策とされてきた思想である。それによれば、先住民は社会的に劣った人々であったので、社会的に淘汰され、ヨーロッパ系の人々に従属的な現在の位置にあるという。革命後の政権により、先住民たちの過去は偉大な文明の遺産としてナショナルイメージに取り込まれる一方、現実の先住民たちは西洋をモデルとする国民国家への発展の阻害要因とみなされた。そこで編み出されたのが、社会強者であるヨーロッパ系のエリート支配層の権力を正当化するための恩顧主義であった。先住民は権威を敬い、身の程を知ること、保護され、存在を容認されるのである。

この社会ダーウィニズムと手を取りあって人々の想像力の中に侵入しているのが人種選良主義、つまりヨーロッパ系人種の優越性で

11) 植民地時代には先住民を指すのに、gente sin razónということばが使われた。文字通り訳すならば、「理性を欠いた人々」である。これに対して、スペイン人はgente con razón、「理性を持った人々」であった。

ある。テレノベラでのヒロインが、貧しい環境に生を享けたという設定、あるいは農村部の出身であるという筋書きである場合でも、彼女は常にヨーロッパ系の容姿を持つ女優によって演じられる。これに対して男性の役柄設定は通常、社会の上層部に出自を持つ、先住民社会とは無縁の人物像であるがゆえ、ヨーロッパ系の容姿を持った俳優によって演じられることには何の矛盾もない。しかし、一般に貧しい出自のヒロインの成功物語であるテレノベラは、男性による女性の征服、女性の男性への従属という結末を持っている。このことはすなわち、男性至上主義に加え、西洋なるものを持って生まれた者の、そうでない者にたいする優位性をも意味している¹²⁾。これに加え、視聴者がこうした設定に何の疑問も抱かないことが、如何にこの人種に関わるイデオロギーが人々の間に浸透し、内面化されているかを如実に示しているのである。

おわりに

こうしてふたつの異なった番組を仔細に見てくると、これらは合わせ鏡のように、ひとつの像のふたつの異なった側面を映し出しているように思われる。リンチ事件の中継は、劣悪な社会環境を改善するための加害者たちのアピールという思惑とは裏腹に、被害者への集団での暴行とその遺体への損壊という酸鼻な出来事のみが強調されることによって、その当事者たちは人間の尊厳さえも踏みにじるような、理性を欠いた、激情と本能に駆られる人々であるというイメージを喚起することになる。こうした表象は、テレノベラの中で常に示されている、メキシコという近代国民国家、つまり内部に階層制を保持しながら、ひとつの均質な共同体として想像されてきた社会をその陰で支えてきた人種主義と見事に

呼应する。先住民たちは植民地時代以降、階層化された社会の中で常に最底辺におかれ、その上部との力関係は不均衡なものであり続けてきた。スペインからの独立と革命の後、メキシコという想像された共同体が成立する過程においても、西洋モデルへの障碍となるとされた先住民の現実の生活習慣、文化は、そのごく一部が、民衆が自らのアイデンティティをメキシコというネーションに対して重ねあわせやすいように、ナショナルイメージの中に取り入れられたにせよ、エリート層から負の表徴を与えられ、彼らが置かれた悲惨な社会的環境とともに、マスメディアなど不特定多数のメキシコ国民の目に触れるところから意図的に排除されてきたのであった。新自由主義政策による社会不安の増大とマスメディアの自由化というものが、端無くもこうした隠され続けてきた、反近代としての野蛮なメキシコ、そして栄光ある古代文明を産んだ人々の現在の劣悪な社会状況を中流以上のメキシコ国民の前に曝すことになったのである。テレノベラが、メキシコ国民はかくあるべきであるという行動規範、あるいはそうした規範を内面化した人々がかくありたいと願うモデルを、社会ダーウィニズム、人種主義をその背後に隠し持ちながら指し示すものであるとするならば、ニュース番組で放送されるリンチ事件の映像は、メキシコが近代国家として成立する際に背後に押しやってきた、もうひとつのメキシコ、支配エリート層から野蛮で劣った、文明化以前の克服すべきものとされてきたメキシコを、近代国家メキシコ

12) ヒロインがヨーロッパ系の容姿を持っていることは、西洋の男性による先住民の女性の征服という、新大陸発見以来繰り返されてきた現実を、そのままの形で映し出す露骨さ、そしてそれが喚起する情緒的な衝撃を緩和すると同時に、今日の社会ではほとんど起こりえない、こうした先住民系のメキシコ人女性とヨーロッパ系メキシコ人男性との間の恋愛、結婚というものに現実感を与えている。

という想像の共同体の行動規範を内面化した人々に対して、再び負の符丁を付けて提示しているのである。

参考文献

Durán, Diego

1967 *Historia de las indias de Nueva España e islas de tierra firme*. México: Porrúa.

El Universal

2004 "Olor a alcohol y a carne quemada". *El Universal* (México), 24 de noviembre.

2004 "Tláhuac: ¿condenado al olvido?" *El Universal* (México), 5 de diciembre.

2008 "Que ya no satanicen a Canoa". *El Universal* (México), 15 de septiembre.

Fuentes Díaz, Antonio

2006 Subalternidad y violencia colectiva en México y Guatemala. *Fermentum: Revista Venezolana de Sociología y Antropología* 16(46): 415-428.

Fuentes Díaz, Antonio & Leigh Binford

2001 Linchamientos en México: una respuesta a Carlos Vilas. *Bajo Volcán* 2(3): 143-154.

Godoy, Angelina Snodgrass

2006 *Popular Injustice: Violence, Community,*

and Law in Latin America. Stanford: Stanford University Press.

Krupa, Christopher

2009 History in red: Ways of seeing lynching in Ecuador. *American Ethnologist* 36(1):20-39.

La Jornada

2004 "Queman a vivos a 2 agentes de PFP en Tláhuac". *La Jornada* (México), 24 de noviembre.

Pérez Montfort, Ricardo

2000 *Estampas de nacionalismo popular mexicano*. México: CIESAS.

Sahagún, Bernardino de

1981 *Historia general de las cosas de Nueva España*. México: Porrúa.

Shadow, Robert D. y María J. Rodríguez-Shadow

1991 Los robachicos: San Francisco Coapa, Puebla. *México Indígena* 22: 41-46.

Vargas Llosa, Mario

1990 *Contra viento y marea (III)*. Barcelona: Seix Barral.

Vilas, Carlos M.

2005 Linchamiento: venganza, castigo e injusticia en escenarios de inseguridad. *El Cotidiano* 20(131): 20-26.